

日本サッカーと海外サッカーのバイタルエリアでの崩しの違いに関するゲーム論的研究

寺井龍太郎（競技スポーツ学科 コーチングコース）

指導教員 山田 庸

キーワード：バイタルエリア，崩し，攻撃

1. 緒言

近年の日本サッカーは常に得点力不足が課題に挙げられる。得点力不足を指摘された試合では敵陣深くでの人数をかけた守備に対し崩し切れず苦戦を強いられることが多い。

海外の強豪とされるチームには得点を量産し多少の失点は気にしないチームや、1点を確実に守りきる堅守重視のチームなど、強豪によっても様々なチームカラーが確立されている。

日本と海外での崩しの違いが明確にされれば日本のこれからのスタイル構築や得点力不足の解消につながると考えられる。

その要因についての研究は多くなされている（藪内，2015）が、バイタルエリアでの崩しの違いをデータに基づいた客観的分析は行われていない。

そこで、本研究では日本代表ワールドカップ（以後、W杯）アジア最終予選5試合と欧州選手権（以後、EURO）の5試合を対象に日本と海外のバイタルエリアでの選手とボールの動き、得点までの崩しの違いを比較し検討することを目的とした。

2. 研究方法

対象試合は2016年に行われた日本代表のW杯アジア最終予選5試合とEUROの5試合の攻撃シーンでのプレー、エリア別集計を映像分析によるデータ収集で行った。各大会公式映像を観察し、各試合の相手陣内で行われた攻撃における調査項目をカウントした。

3. 結果および考察

データとしてはバイタルエリアを経由した攻撃も経由をしていない攻撃もあまり差は見ら

れなかったが、バイタルエリアを経由した攻撃は一度中央に入れることでその後の攻撃にバリエーションが生まれていると感じた。同じサイド攻撃でも日本の場合はすでにブロックを作られている中にクロスを上げているが、海外の場合はディフェンスの体勢が整っていないところに上げるクロスや、ペナルティエリア深くまで切り込んでのマイナスのクロスなどバリエーションが多彩であった。

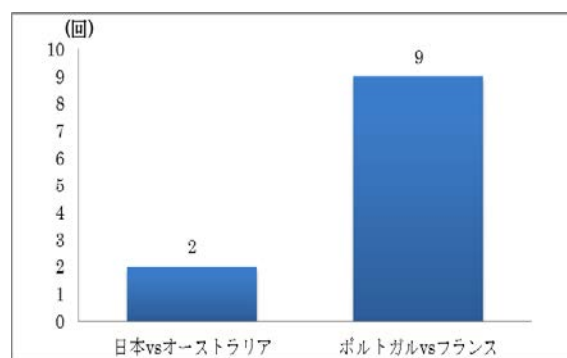


図1 バイタルエリアを経由したプレー回数
日本は総合的なデータから海外と比較するとバイタルエリアを経由したパス本数とドリブル回数が海外よりも少なかった。そこから推測できる日本の課題は選手一人一人のスキルアップと、チームの連携をより高めることである。

4. 今後の課題

日本と海外ともにデータを増やし、より多くの得点シーンから詳しい分析結果を出す必要がある。

引用参考文献

藪内健人（2015）サッカーにおける決定力不足の原因に関する研究-特に決定力について
2015年度びわこ成蹊スポーツ大学卒業論文抄録集，P21.